イアン・マキューアンと無神論

恒　川　正　巳

富山大学人文学部紀要第 74 号抜刷
２０２１年２月

イアン・マキューアンと無神論

恒　川　正　巳

英国の小説家イアン・マキューアン（Ian McEwan 1948-）は，自他ともに認める無神論者である。彼の小説では，信仰と合理主義の相克がたびたび物語の核として登場する。たとえば，マキューアンが概念小説（novels of ideas）を書いていたと振り返る時期がある（Groes 148）。1987 年の『時間のなかの子供』（*The Child in Time*）から 1997 年の『愛の続き』（*Enduring Love*）までの期間は，最初に知的考察の対象となる概念があり，その概念の探求にふさわしい物語形式を求めて作品が創作されていた。この時期の 4 つの小説のうち，1992 年出版の『黒い犬』（*Black Dogs*）は，神秘主義と無視論的合理主義の間の論戦を物語化している。3 人の主要な登場人物のうち 2 人がそれぞれの立場を体現し，夫婦であり続けながらも互いの世界観をけっして受け入れることができない状況が描かれている。2005 年の『土曜日』（*Saturday*）は，合理主義的で物理主義的な人間観が色濃い主人公が，9.11 同時多発テロの不安に覆われたロンドンで幸福な暮らしを維持する様子を描いている。21 世紀に入り，マキューアンは信仰への合理的懐疑の必要性を何度も呼びかけており，『土曜日』はそうした主張を幸福な物語展開をつうじて表現した作品と解釈できる。2014 年の『チルドレン・アクト』（*The Children Act*）は，世俗社会における信仰の位置づけを問題とした作品である。信仰ゆえに輸血を拒否して死を選ぼうとする少年の，信者以外には極端に不合理と思える希望をどう扱うべきかが物語のなかで問われた。主人公は合理主義側に立つ裁判官である。彼女が輸血を拒む本人と家族の主張を退け，少年の命を救うという展開は，合理主義に偏向しすぎており，あまりに信仰を軽視していると批判する書評もあった（Connolly, Walton）。

このように合理主義と信仰心の対立関係がマキューアン作品の大きな特徴であることをふまえ，本論ではマキューアン自身の無神論的立場を彼のインタビューやエッセイに注目して確認していきたい。マキューアンは広い意味での自然主義的な立場をとり，超自然的なものの存在を完全に否定している。その当然の帰結として，彼の世界観に神の居場所はない。また人間を堕落に導き，破滅を引き起こす超越的な悪も存在しない。彼にとって超自然的なものを求める信仰は不合理なものにほかならない。一方で，人間自体がそもそも不合理な生き物である。歴史と世界を俯瞰してみれば，宗教は人間にとって必要なものであり続けてきた。その点をマキューアンは認め，宗教全般への不寛容を是認してはいない。信仰は人間性のある部分を反映し，一定の役割を担い続けてきた。長い目で見ればその役割を代わりに担うことができるのは科学であると彼は考える。マキューアンは科学への強い関心と信頼を公言している。彼が思い

描くのは，文学的価値と科学的真実の融合である。マキューアンの無神論は，信仰の無意味さを声高に訴え，合理主義の絶対的な正しさを説くような戦闘的なものではない。信仰を排除さえすれば世界がよくなると彼が考えていないことは，このテーマを扱った彼の小説を読めばあきらかである。無神論的立場はそれ自体で道徳的葛藤を解決はしないし，信仰に代わって人生の意味を与えてくれるものではない。だからこそ，マキューアン作品の登場人物たちは，倫理的難問に直面して引き裂かれ，生きる目的を模索し続けるのである。

マキューアンは現代社会の状況に積極的な関心を持ち，気候変動，核軍縮などの文学以外の領域にかんしても発信を行ってきた。2001 年のアメリカでの同時多発テロ事件直後からは，無神論者の立場から積極的に発言をしている。2002 年の“Faith and Doubt at Ground Zero”と題されたインタビュー（以下“Faith”と略す）では，みずからが無神論者であることを次のように公言している –“I'm an atheist. I really don't believe for a moment that our moral sense comes from a God.”また，彼の無神論的立場はすんなりと獲得されたものではなく，信仰と不信仰の間を行きつ戻りつしながら，現在の境地に至ったと語られており，それはちょうど『黒い犬』の語り手ジェレミー（Jeremy）が，義父の合理主義と義母の神秘主義の間で揺れ動いているのと同じだったと彼は述べている。

小説家として成熟期を迎えたマキューアンは信仰についてどのような考えを持つにいたったのか。以下，その中身を具体的に確認する。まずは“End of the World Blues”と題された彼のエッセイを見てみよう（以下“End”と略す）。この文章は 2007 年にスタンフォード大学で行われた講演をもとにしており，クリストファー・ヒッチェンズ（Christopher Hitchens）編纂の *The Portable Atheist: Essential Readings for the Nonbeliever* に収められている。ヒッチェンズはマキューアンの友人であり，「新無神論」の四騎兵の一人と呼ばれた文筆家である。ここでのマキューアンは，21 世紀の現代において終末論が根強くはびこっている状況について触れながら，終末論が説くような文明の終焉と大量の人々の死がもし実際に起こるとするならば，それは喜ばしい新世界の幕開けなどではなく，恐怖と悲しみでしかないと結論づける。そのうえで，そうした悲劇から人類を救うことができるのは人間自身だけであるという事実に信仰を持つ人々も気づくべきであると述べている。

終末論とは，文明の終わりという本来，予想するのがきわめて困難でほとんど不可知ともいえる出来事について，その到来の時期や状況を具体的に予言するものであり，しかもそこには強力な確信が伴うと説明することからマキューアンは始める。終末論は歴史をつうじて人間とともに存在し続けている。このことを確認するためには，中世ヨーロッパの終末思想を論じたノーマン・コーン（Norman Cohn）の *The Pursuit of the Millennium*（1957）を参照することをマキューアンは勧めている。コーンの読者は，中世の終末論的思考のいかに多くが現代にそのま

ま生きているかを知ることになるからだ。終末論は驚くべき生命力と適応力を持っており，現代に至るまでその強い影響力を保持してきた。マキューアンはコーンに依拠しながら，ソヴィエト的社会主義における暴力的闘争の肯定や，ナチズムの大量虐殺への衝動と終末論とのつながりを指摘する。核戦争，パンデミック，環境破壊などによる文明崩壊の可能性も，不可避の歴史的流れの必然の帰着点として語られることで，運命論的性質を帯び，終末思想を体現することになる。終末予言は，21 世紀の世界において 30 年前とはくらべものにならない大きな力を持っているとマキューアンは述べる。

このエッセイの最後の部分では，マキューアンの広い意味で自然主義といっていい態度がよく現れている。人類のかかえる諸問題を解決できるのは人間だけであり，その事実は信仰心の有無にかかわらず，人類全体で共有されるべきものであると彼は主張する。この考え方は，一般的に無神論を特徴づける概括的な自然主義と合理主義とに合致する。無神論を特徴づけるのは，ジュリアン・バギーニ（Julian Baggini）が「小文字で始まる自然主義」（'naturalism-with-a-small-n'）と呼ぶ，広い意味での自然主義だ（4）。マキューアンは，超自然的で神秘的な力の存在や介在を明確に否定している。そのうえで，この人間世界に起こる事象を，徹頭徹尾人間的なものとして理解することを主張している。こうした自然主義は，あらゆる主張が合理性にもとづき，理性や客観的な証拠に依拠し，検証可能で反証可能であることを要求する（Baggini 76）。マキューアンは，上述のインタビュー（“Faith”）で人間を超越した，説明しがたい悪が存在すると考えるのかと質問された際にも，そうした考え方をきっぱりと否定している。

> I don't really believe in evil at all. I mean, I don't believe in God. I certainly don't, therefore, believe in some sort of supernatural or transhistorical force that somehow organizes life on dark or black principles. I think there are only people behaving, and sometimes behaving monstrously. Sometimes their monstrous behavior is so beyond our abilities to explain it, we have to reach for this numinous notion of evil. But I think it's often better to try and understand it in real terms, in . . . (sic) either political or psychological terms.

神がいない世界には，神秘的な悪もない。人はときに筆舌に尽くしがたいおぞましい行いに手を染めるが，それもまた人間性の一部なのである。人間の歴史の主体はあくまで人間であり，人間を導き，ときに操る，超越的な意志の存在をいっさい認めないのがマキューアンの一貫した立場だ。

神も悪もない現実世界には，理想的正義もない。上述のインタビュー（“Faith”）でマキューアンは，自身の不信仰が確固たるものになったのは，経験を重ねた結果，不幸が完全にランダムに配分されているという結論に達したからだと述べている。幼い子どもたちがガンで死に，善人が交通事故に巻き込まれる一方で，悪人が長寿を誇る。そこに詩的正義（poetic justice）はない。そうした世界にもし神がいるとすれば，それは人間にはほとんど無関心で，人間のこ

となどほったらかしにする神であるか，あるいは，大いなる悪意をもって人間世界に介入する神かのどちらかであるとマキューアンは述べる。この意味で 2001 年のアメリカ同時多発テロ事件は，彼の不信仰をそれまで以上に確固たるものにした。聖職者たちが「神の計り知れない御業」を説くのを耳にするとき，マキューアンの無神論はむしろ揺るぎないものになる。

> I find no resource at all in the idea, and it saddened me to see, hear, listen to priests tell us that their "sky god" had some particular purpose in letting this happen, but it was not for us to know it. It just seemed to me sort of irrelevant, at least. And I could probably think of stronger words for it—an offense to reason really. We have to understand the events of September the 11th in human terms. . . . (sic) The healing process, too, is one that's in our hands. It's not in the hands of the "sky gods." It's only for us to try and work it out.

9.11 テロは，天空から見下ろす神の意志に起因するものとして扱われるべきものではない。現実の，あくまで人間世界の出来事として受け止め，その癒しと解決とを我々自身が模索していかなければならない。そう述べるマキューアンの語気は熱を帯びている。

無神論者は，信仰と理性の抜き差しならない対立を前にして，理性を選択する。しかし，人間は非合理の存在でもある。先の引用でマキューアンが神を否定し，同時多発テロを「人間的観点から」理解することを主張したとき，そこでは人間理性への全面的な信頼が語られていたわけではない。むしろ，人間の邪悪さこそが前提にあったといっていい。マキューアンは，リン・ウエルズ（Lynn Wells）とのインタビューのなかで，人間という種にとっては理性的であり続けることはたやすいことではないと語っている（Wells 132）。人間は衝動的で，階級主義的思考に囚われ，迷信深い。マキューアンのフィクションがつねに描き続けるのは，そうした人間から突然に噴出する予期せぬ非合理である。マキューアンは同時多発テロに強い衝撃を受けながらも，9.11 が彼の人間観を変えることはなかったと述べている（"Faith"）。9.11 はあまりに悲劇的な出来事ではあるが，人間の残虐性が現れたのはこれが初めてではない。これまでも歴史上多くのむごたらしい出来事が人間によって引き起こされてきたし，ホロコーストのように, 大規模で組織的な虐殺が行われたこともあった。その意味では, 9.11 が起きたからといって人間性の理解が変わるわけではない。人間の歴史から悪の影が拭いきれないとすれば，それは人間自身の内なる闇が生み出したものにほかならない。

無神論者のなかには，宗教は人間にとって有害でしかないとして，宗教はなくなるべきであると主張する戦闘的な論者もいる。しかし，マキューアンはそうは考えない。宗教は人間の善なる部分を引き出しもするし，人間を悪に向かわせもする。宗教の本質に人間の闇が内包されているわけではなく，信仰心は道徳的に中立的な力であると述べている（"Faith"）。超自然的なものへの信仰はあらゆる文化に存在し，人間性に深く根ざしている。信仰それ自体は善や悪であるのではなく，人間性のなかに織り込まれた善と悪を体現するひとつの形式であるとマ

キューアンは考える。

マキューアンは，宗教の存在意義を否定するのではなく，信仰にまつわる排他的な教条主義を否定している。信仰心はそれが合理的であろうとなかろうと，人間とは切っても切れないものだ。別のインタビューでも彼は以下のように語っている。

> I have no religious faith, but I don't for a moment believe that rationalism, science, some version of positivism, is going to suddenly sweep the religious impulse away. Although I might not subscribe to any supernatural beliefs, I can't count myself free of all of those basic dreads that have impelled religion. (Groes 149)

マキューアンは，理性主義や科学や実証主義が宗教への衝動を消し去ることができるとは，まったく考えていない。信仰を否定することは人間を否定することに等しい。むしろ，各人がみずから選んだそれぞれの神を信仰する自由が保証されることこそが必要であると彼は話す（“Faith”）。そして，ここが肝要なのだが，その自由を保証するのは非宗教的精神だけであると彼は主張している。つまり信仰や独断的で独善的態度が暴走したときに，我々を守る盾となるのは合理主義なのだ。ほぼ同じ事は，ゼイディ・スミス（Zadie Smith）と行った 2005 年のインタビューでも語られている。

> I'm not against religion in the sense that I feel I can't tolerate it, but I think written into the rubric of religion is the certainty of its own truth. And since there are 6,000 religions currently on the face of the earth they can't all be right. And only the secular spirit can guarantee those freedoms and it's the secular spirit that they contest. (Roberts 124)

宗教は世俗精神に異議を唱える。しかし，信仰の自由を守ってくれるのは，信仰が個人の自由と良心の領域に属するものであり，国家やその他の権威に束縛されるべきではないと考える，広い意味での自由主義にもとづいた世俗主義（Baggini 88）なのである。こうした主張に，超自然的な力の介在を認めず，「人間的観点から」の理解を唱えるマキューアンの非戦闘的な無神論者としての姿勢がもっともよく現れている。

上述の引用では，宗教の根本にはみずからの正しさについての揺るぎない確信があることが指摘されている。この確信とユートピア思考が結びついたときこそ，警戒しなければならないとマキューアンは警告する（“Faith”）。現世を超越した永遠の至福を説く人々をわれわれは疑わなければならない。9.11 同時多発テロは，まさに祝福の地へ自分が向かいつつあると信じたテロリストによって引き起こされた。根拠のない不合理な信仰は，ときに悲劇をもたらす。合理的には説明できない「特別な」内的確信，「証拠を必要としない疑いようのない」信念は，大きな危うさをはらみ，恐ろしい行動へと人を駆り立てることがある。（Baggini 98-100）。このように，宗教自体は道徳的にあくまで中立であるが，非現実的で行き過ぎた確信には懐疑的態度で接する必要があるとマキューアンは述べている。そして彼は，好奇心を尊重することを

勧める。人間に備わった自然な好奇心こそが，世界と世界におけるわれわれの立ち位置についての正しい理解をもたらす起点となるものだからある。好奇心の尊重は，精神の自由を保証する。組織化された信仰はしばしば好奇心を抑圧するが，それは精神の抑圧に他ならず，看過することのできないものなのである（“End” 237）。

理性的懐疑と好奇心の尊重は，科学への信頼へとつながる。マキューアンは，彼の小説においてしばしば科学的知見を題材にし，物語のなかで重要な役割を与えている。『時間のなかの子供』と『愛の続き』は科学的事実に物語形式を与えた概念小説の色合いが濃い作品であるし，脳外科医を主人公とした『土曜日』では，脳と心の関係を探索する神経科学への敬意が強く感じられる。マキューアンは生涯をつうじて科学への関心を持ち続けてきており，科学の学位をとらなかったことをしばしば後悔したと 1995 年のインタビューで述べている（Roberts 72）。リベラルアーツ教育は一般的に科学への不信感を生み出してしまいがちだということを指摘し，自分はそうした不信感とは無縁であると語っている。さらには，信仰を持たない自分にとっては科学が唯一の信頼できる形而上学だとさえ話している（Groes 148）。科学のみが，新しい証拠や懐疑，敵対的な批判を糧にして絶えず自己修正する能力を有し，それによって健全さを維持しながら発展していくことができるからだ –“Only science is able to correct its course constantly as its knowledge base grows and more evidence is gathered. Unlike religion, it thrives on scepticism and informed but hostile scrutiny” (Wells 133)。自身が間違っている可能性を閉ざさないことが，教条主義の罠を避けることにつながる（Baggini 104）。

無神論の自然主義は，人間を単に生物学の法則にもとづいた動物の一種であるとみなす（Baggini 17）。マキューアンは，*The Literary Animal* と題された文学と科学の融合をテーマとした論集にも，“Literature, Science, and Human Nature” という文章を寄稿しており，そこでは人間の種としての特性を明らかにする科学の意義深さが指摘されている。人の性質には固有の環境や文化，歴史によって形成されるものと，環境に依存せず人類に共通して認められるものがある。前者は個別の文化や時代ごとに異なるかたちで存在し，比較的短期間で変化していくが，後者は人間という種に普遍的に備わっており，そう簡単には変化しない。科学は人間性の後者の部分に光を当てる。このことをマキューアンは，ダーウィンの進化論やポール・エクマン（Paul Ekman）の感情と表情にかんする研究を挙げて例証している。また，認知心理学でいうところの「心の理論」，人が生来持っている一定程度自動化された他者理解の能力が，読者が文学作品の登場人物を理解するうえで大変重要な役割を担っていることも指摘している。文学は，個別の人間と個別の状況を描くことを基本とするが，すぐれた作品は同時に普遍的な人間性をも浮かび上がらせる。科学と文学は異なるアプローチながら，ともに人間性の探究に従事し，おたがいを補完し合い，あらたな人間像を形成していくのだとマキューアンは語る。近年，感情や意識，そして人間性そのものが生物科学の対象となってきたことを考えると，文学と科学は

今後ますますたがいの領域を行き来することになり，進化論はいままで考えられていた以上に人間性の多くを語るのではないかと彼は見通す（Roberts 102）。さらには人文学，社会科学と自然科学の融合から，今後あらたな倫理体系が生まれることをも期待している（Roberts 72）。

科学が生物学的存在しての人間の普遍的性質を語るのに対し，宗教はマキューアンにとってあくまで文化的に規定されるものでしかない。無神論者にとっては，異なる世界観を説く宗教が世界に多数存在し，互いを否定しあっているという事実は，それらの神々が人間がつくりあげた二次的な構成物にすぎないことを物語る（Baggini 29）。超自然的なものへの欲求は個別の文化を超えて人間性にあまねく組み込まれていると考えるべきだが，一方で 6000 以上も存在する個々の宗教のそれぞれの世界観が絶対的で形而上学的な正しさを備えていることはありえないとマキューアンは語る（Roberts 124）。彼の無神論的立ち位置から見れば，科学がもたらす普遍的知見は，宗教の個別の教義の相対性を際立たせるものである。

科学は宗教と対峙し，われわれをより理性的な存在へと導く力を持っている。しかし，宗教がかならずしも悪ではないように，科学もつねに善なるものとはいえない。テクノロジーは大量殺戮兵器を生み出し，ホロコーストの出現に加担した。気候変動や，必ずしも好ましいとばかりともいえない大衆文化も作りだした。宗教が道徳的に中立的なものであるとすれば，科学もまた同じであることをマキューアンは指摘する（Wells 133）。

またマキューアンは，科学的精神がわれわれに根付いているとは言い難いとも述べている。人間は科学を持つにいたったものの，依然として超自然的存在への渇望を抱き続けている。たとえば，理性を重んじる科学的思考や懐疑主義は，21 世紀になっても終末思想に取って代わることはできていない。むしろ科学は，それまでには考えられないほどの短時間で世界を滅亡させることのできる核兵器や細菌兵器を産み出してきたという点で，終末思想を拡散する役割を果たしているとさえいえる。科学が終末思想に代わって根付くためには，たとえば『ヨハネの黙示録』（The Book of Revelation）のように，シンプルでけばけばしい力強さで多くの人々を惹きつけ，同時に人生の意味を説くことのできるような包括的な物語が必要だ。しかし，科学はまだそうした物語を獲得できてはいない。自然選択説は終末思想の有力なライバルに育つ可能性を秘めているものの，残念ながらいまだインスピレーションあふれる「統合者，詩人，ミルトン」（“its synthesizer, its poet, its Milton）が現れていないと，マキューアンは述べている（“End”355-60）。科学と信仰のせめぎ合いは，物語の覇権争いでもあるのだ。マキューアンは別のインタビューでは，科学の知見を多くの人々に届ける役割を担うサイエンス・ライティングの意義とその文学的価値を高く評価しており（Roberts 149-50），そこでもやはり文学と科学の融合を志向している。

マキューアンが科学を尊ぶのは，科学が未来への楽観的態度を体現しているからである（Groes 151）。科学は組織化された好奇心ともいうべきもので，今は理解できないこと，知ら

ないことでも，やがては知り得るのだという楽観的な希望をエネルギーにして成り立っている。たとえばマキューアンの『土曜日』は，そうした肯定的姿勢を反映した小説と考えることができる。主人公である脳外科医ヘンリー・ペロウン（Henry Perowne）は，同時多発テロの余波がロンドンに及ぶのではという不安に苛まれつつも，満ち足りた生活を送っている。暴漢に自宅に侵入され，家族の命を脅かされる極限状態に追い込まれながらも，最終的に物語は彼に幸福を享受し続けることを許して終わる。マキューアン自身の言葉によれば，『土曜日』は「問題を抱えた世界での幸福を描く試み」（“an attempt to describe happiness in a troubled world”）である（Groes 151）。マキューアンがペロウンに幸福を与えたことは，あまりに楽観的だとして一部の読者を当惑させた。しかし，『土曜日』は，科学的精神を愚直に見えるほど信じて生きるペロウンと，彼にふさわしい楽観的ビジョンとを物語化したものと考えることができる。また，マキューアンはリベラルアーツの教養が生み出す悲観主義的バイアスにも異議を唱えていて，それも科学を志向する理由のひとつだと述べている。種としての人間は，ただ未熟で残忍なだけではなく，勇気，優しさ，愛，すばらしいユーモアも持ち合わせている。人間が持つ「罪を帳消しにする」（redemptive）性質をしっかりと見なければ，バランスがとれないとマキューアンは考える（“Faith”）。

無神論は善悪の根拠を神に求めない。神の存在自体を認めないし，そもそも仮に神が存在したとしても神が善であるためには，善とは何であるかの基準が神とは独立して存在しなければならないと考えるからだ。どちらにしても神を善悪の根拠とみなすことはできないことになる（Baggini 39-40）。信仰を持つ人々にとっては，しばしば神が普遍的な道徳観の源泉の役割を果たすが，無神論者はそれを期待することはできないと覚悟しなければならない。

では無神論者の道徳観はどこから生まれるのか。マキューアンにとって，その答えはエンパシー（empathy）である。彼はエンパシーを「自分以外の誰かとして存在するとはどういうことなのかがわかること」（“knowing what it is to be someone else”），「他人の心の直感的理解」（“apprehension of other minds”）と説明し，われわれの道徳観の土台であると話している（Wells 126-27）。エンパシーは人間が進化の過程で獲得した基本的性質のひとつであり，われわれは他人の心を本能的にとても上手に理解することができる。他人の状況を思い描く想像力が，自分と人々が同様の存在であることを思い出させ，自分以外の人々を思いやる気持ちを生じさせる。エンパシーが行き過ぎた私欲や利己主義を抑制する鍵になるとする考えは，バギーニの主張でもある（44-45）。他人の心を想像することができれば，その人に冷酷な振る舞いをすることはむずかしい。1995 年の時点でマキューアンはつぎのように語っている

> Slowly I’ve come to the view that what underlies morality is the imagination itself. We are innately moral beings at the most basic, wired-in neurological level. We’ve evolved in society. During the seven million years since we branched away from the chimpanzees, our evolution has taken place

> in each other's company. We have shaped each other. We've probably become clever because we've had in part to try and outwit each other or to cooperate with each other or seduce each other. Social behaviour is an instinct with us coloured of course by local cultural conditions. Our imagination permits us to understand what it is like to be someone else. I don't think you could have even the beginnings of a morality unless you had the imaginative capacity to understand what it would be like to be the person whom you're considering beating round the head with a stick. An act of cruelty is ultimately a failure of the imagination. (Roberts 70)

この考えは，2001 年の同時多発テロを以降もくり返し表明される（"Faith"，"Only Love and Then Oblivion"）。9.11 テロを実行した人々は，人間同士を結びつける基本的な想像力を欠いていた。何からの強力なイデオロギーや錯乱した信仰心が，他人を思いやる人間の本能をかき消すために働いたはずだとマキューアンは考える。

エンパシーは，人間性の根幹であるだけでなく，小説の基本原理でもある。物語に登場する人物の人格を読み取ること，物語のなかに人格を作りあげることは，他人が自分と同じような精神を持っているということを理解してはじめて可能になるとマキューアンは述べる（Wells 127）。小説は他人の心に入るための最適の手段であり，したがってきわめて道徳的な形式なのである（Roberts 70）。マキューアンの作品は，1987 年の『時間のなかの子供』を転換点に変化を遂げた。1970 年半ばのデビューから 1981 年の『異邦人たちの慰め』（*The Comfort of Stranger*）までは，道徳とは無縁の登場人物たちがしばしば猟奇的で衝動的な行動をとる様子を淡々と描き，マキューアンは"Ian Macabre"の異名で知られた。しかし，『時間のなかの子供』以降の作品では深い道徳的葛藤を描くようになり，いまでは倫理的考察は彼の作品を語るうえでは欠かせない特徴になった。この転換の背景では，小説という形式の再定義がマキューアンのなかで行われていたという（Wells 126）。1980 年代の初めまでのマキューアンは，登場人物の内面を描くことを意識的に避けていた。登場人物たちの思考や感情を語り手が要約することは，時代遅れの手法だと考えていたのだ。外面に現れる行動や客観的状況をつうじて，描くべき事はすべて描くことができると考えていた。同時に，現実世界の特定の時間や場所への言及を排した「実存的」物語への志向もあった（Groes 152）。しかしこうした手法は，結果的に小説の可能性を狭めることになる。そう気づいたマキューアンは，積極的に登場人物たちの内面に沈潜し，その意識を詳細に描くようになる。この技法的な転換は，必然的に彼の作品においてエンパシーと道徳的想像力が果たす役割を増大させることにつながった。

この道徳的転換はやがて代表作である『贖罪』（*Atonement*, 2001）に結実する。主人公ブライオニー・タリス（Briony Tallis）の罪とそのつぐないの可能性を問い，解決しがたい倫理的葛藤をテーマにした作品である。『贖罪』では，主人公ブライオニーのエンパシーが発達途上にあることが描かれている場面がある。第 1 部でのブライオニーは 13 歳で，大人の世界の入

り口にいる。物語が始まったばかりの第 3 章で彼女は，自分以外の人間は内面を持たない機械にすぎないのか，それとも自分と同じように複雑な意識を持ちながら生きているのかを自分自身に問いかけている。おそらくは後者であるはずだが，そうだとしたら，この世界は耐えがたいほど複雑であると彼女は考える −“For, though it offended her sense of order, she knew it was overwhelmingly probable that everyone else had thoughts like hers. She knew this, but only in a rather arid way; she didn’t really feel it”（34）。ここでのブライオニーは，他者の心を理解するためにみずからに備わった力をじゅうぶんに信頼しきれていない。この場面からほどなく，彼女は大きな過ちをおかし, 姉とその恋人の人生を取り返しがつかないほど狂わせてしまう。ブライオニーの過ちの原因が，自分以外の人間の存在を実感できなかったことにあったことが示唆されている。物語化されているのは，エンパシーの不足が深刻な倫理的問題を引き起こす様である。

善悪を決める普遍的な判断基準は，神が存在しようとしまいと，手に入れることはむずかしい。エンパシーが備わっていても, それだけで道徳的葛藤と無縁になるわけではない。同様に，人生の意味も，神が存在しようとしまいと，どちらにしても見つけることは容易ではない。何かの目的のための道具として生きるのでなければ，われわれはみずからの人生の意味を自分自身で見つけなければならない。たとえ創造者が存在し，私たちの人生の目的をあらかじめ規定したうえで私たちを作りあげたとしても，それだけではその目的が私たちにとっての人生の意味になりえるとは限らない。人はそれぞれが人生に何を求めるのかを自分で決めなければならないのだ（Baggini 59-61）。信仰をもてば機械的に人生の意味が与えられるという考えが幻想であるとするならば，無神論的合理主義が人をより幸せにしてくれると考えるのも幻想だ。マキューアンの 2014 年の作品『チルドレン・アクト』は，そのことを物語化している。信仰心から輸血を拒否し，死を受け入れようとしていた 17 歳のアダム・ヘンリ（Adam Henry）は，主人公である英国高等法院の家事部の裁判官フィオーナ・メイ（Fiona Maye）の判決によって輸血を施され，命を救われる。アダムは命を救われたことに感謝し，あらたな人生の輝きを感じながら生き始める。一方で，彼は信仰心を失い，生きる目的が消滅したことによる喪失感に苛まれる。アダムはフィオーナを師と仰ぐが，フィオーナは彼に生きる意味を提示することができなかった。その結果，アダムはあらためて死を選んでしまう。信仰の不合理から目を覚まさせさえすれば，人を幸せにできるといった単純な話ではない。無神論がアダムに見せた世界像は，より客観的で正確で，自由にあふれていたはずだ。しかし，アダムの世界は生まれて以来ずっと信仰によって意味で充たされてきたのに，新しい世界には信仰の代わりになる安らぎの物語は存在しなかった。作り置きの充足感はまがいものにしかならない。アダムはあらたな人生の目的を探し出すために，みずからの足で歩み出さなければならなかったが，信仰を失った彼の歩みは赤子のような危うさをはらんでいた。結果的にフィオーナはアダムに寄り添うことに尻込みしてしまう。優れた理性と感受性で尊敬される裁判官であるフィオーナにとっても，

人生の意味を見つけるのは容易なことではない。その困難さをよくわかっていたからこそ，彼女は無意識にアダムから遠ざかってしまったのだ。

マキューアンの信仰にかんする立場を一言でまとめれば，攻撃的でない無神論者ということになるだろう。本論ではジュリアン・バギーニが無神論を紹介した書籍をたびたび参照した。それはみずからを非戦闘的無神論者と説明するバギーニの主張が，マキューアンの無神論者的立場を理解するのに大変役に立つからである。マキューアンは超自然的存在を明確に否定しつつも，戦闘的無神論者とは異なり，信仰心を悪や不幸の起源とはとらえていない。あまたの宗教が現在まで存在し続けてきたという歴史上の事実をふまえ，人間には信仰を求める性質があることを認めている。戦闘的無神論者とは異なりマキューアンは，おそらくは不承不承であろうが，信仰が人間のなかに生き続けていくことを認めている。そのうえで，いびつな信仰が悲劇へとつながる可能性に大きな警鐘を鳴らしている。

科学はときに大きな破壊の手段となるが，マキューアンにとっての科学は，好奇心の喜び，希望，達成を意味している。さらに彼は科学と文学の融合を思い描く。それは科学的事実の正しさと文学のスタイルとの融合である。科学がみずからの詩人を見い出し，その言葉が人々の心に響く表現を獲得するとき，人類と科学的精神との間にはより自然な関係が築かれるはずだからだ。

無神論的立場は合理的である。だが，理性的であることが，葛藤を解消してくれるわけではない。むしろ真の葛藤がそこから始まる。マキューアンは『黒い犬』と『チルドレン･アクト』で無神論的合理主義が直面する倫理的葛藤を直接的に扱っている。いずれの作品でも無神論的立場が無条件で賛美されることはない。『黒い犬』は，神秘主義に傾倒した妻ジューン（June）と徹底した合理主義を貫く夫バーナード（Bernard）の，愛し合いながらも互いを遠ざけざるをえない夫婦関係を軸に展開する。物語はバーナードのかたくなさを印象づけ，読者はジューンの不合理だが洞察力のある人間理解に少なからぬ共感を覚えてしまう。『チルドレン･アクト』のフィオーナは，エホバの証人の教えに対峙して理性の論陣を築き上げアダムの命を救うことに成功する。しかし彼女はその後みずからの非理性的な行動の結果，激しい後悔の念に苦しむことになる。これらの作品において作者自身の無神論は，ひとつには道徳的葛藤の探求のため，さらには物語構造の芸術性の追求のため，直接的でない，柔軟で複雑な現れ方をしていることに注目しておくべきであろう。[1)]

注

1) マキューアンの自然主義は，先鋭な物理主義（physicalism）ではなく，あらゆる事象を物理的に説明することを志向しているわけではない。この点を考えるときに興味深いのは『土曜日』の主人公のヘンリー・ペロウンである。彼は人文学的教養から相当に遠いところにいる，物理主義者的考えを持つ登場

人物である。ペロウンが造形されるにあたっては，作者自身の個人的な特徴が多く盛り込まれている。ペロウンは作者自身が住む家に住み，彼の妻や子どもたちは作者自身の妻や子どもたちと共通点を持つ。とくにペロウンと認知症を患う母との関係は，作者自身の母との関係そのものであるとマキューアンは語っている（Roberts 144）。しかし同時にマキューアンは，ペロウンは「自分ではない」とも断言している。ここでも作者の無神論は，変形を施されたうえで物語に現れている。

引用文献

Baggini, Julian. *Atheism: A Very Short Introduction*. Kindle ed., Oxford UP, 2003.

Connolly, Cressida. “Improbable, Unconvincing and Lazy–Ian McEwan’s Latest Is Unforgivable: A Review of *The Children Act*, by Ian McEwan.” *The Spectator*, 6 September 2014, https://www.spectator.co.uk/article/improbable-unconvincing-and-lazy---ian-mcewan-s-latest-is-unforgivable. Accessed 24 September 2020.

Groes, Sebastian, ed. *Ian McEwan: Cotemporary Critical Perspectives*. 2nd ed., Bloomsbury, 2013.

McEwan, Ian. *Atonement*. Vintage, 2002.

---. *Black Dogs*. Vintage, 1992.

---. *The Children Act*. Vintage, 2014.

---. “End of the World Blues.” *The Portable Atheist: Essential Readings for the Nonbeliever*, Kindle ed., by Christopher Hitchens, Da Carpo, 2007, pp. 351-65.

---. “Faith and Doubt at Ground Zero.” *Frontline*, 2002. https://www.pbs.org/wgbh/pages/frontline/shows/faith/interviews/mcewan.html. Accessed 17 September 2020.

---. “Only Love and Then Oblivion. Love Was All They Had to Set Against Their Murderers.” *The Guardian*, 15 September 2011, https://www.theguardian.com/world/2001/sep/15/september11.politicsphilosophyandsociety2. Accessed 22 Sep 2020.

---. *Saturday*. Vintage, 2006.

Roberts, Ryan, editor. *Conversations with Ian McEwan*. UP of Mississippi, 2010.

Walton, James. “Review: ‘Diminishing Returns.’” *The Telegraph*, 3 September 2014, https://www.telegraph.co.uk/culture/books/bookreviews/11061406/The-Children-Act-by-Ian-McEwan-review-diminishing-returns.html. Accessed 7 September 2019.

Wells, Lynn. *Ian McEwan*. Palgrave Macmillan, 2010. New British Fiction.